

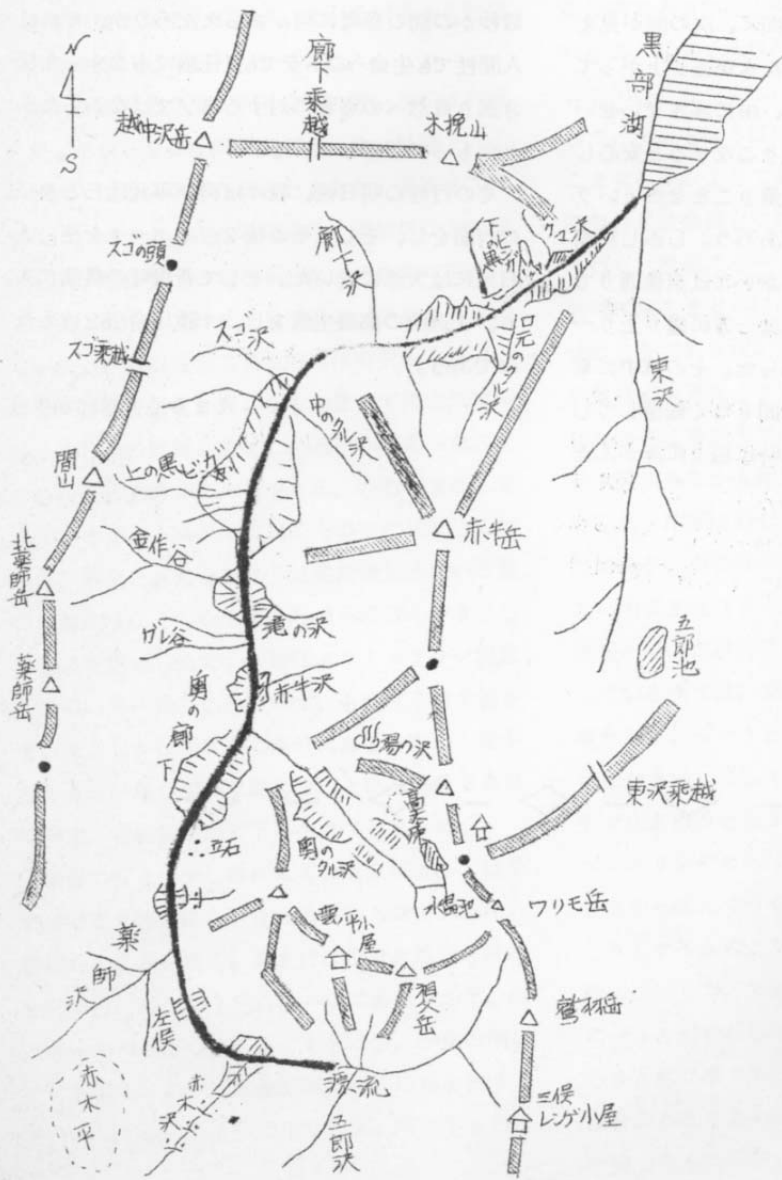
黒部川，上廊下

かぎりなくさびしけれど
われらは
すぎしみをすて
まことにこよなきみちをすてて
いまだ知られざる川にいどみ
かなしくもすすむなり

完全航行の記録

一 道程より一

箕島祐二



「黒部川」その名からして原始的な感じがする。そしてまだ人間を全然よせつけない神秘的な日本一の急流、落差40分の1を持つ川これが黒部川だ。この川をくだるまでに、我我部員は保津川、武庫川等の川の技術、その上に山の技術特に岩登り徒歩といったトレーニングを続けた。

8月5日20時6分全員大阪を他の登山者とは一風変わったキスリングにオールをつけ足には地下足袋といった姿で元気に出発した。何か我々だけが他の登山者とは違った事をやるのだという意識がファイトとなってもりあがってくる。富山小見折立そして太郎小屋へと神秘的黒部川めざし

て山道を一步一步踏みしめていく、足もとには高山植物が美しく咲いて黄色や赤・緑といった小さな草花が目にとまる。雪渓がところどころに陽をうけて輝いている。ボートではこれまで経験しなかった自分の足で原流まで登るのだという実感が湧いてくる。太郎山の傾斜はなだらかだが、照りつける太陽と重荷の為に心は黒部川にあるのだが、足がなかなかいうことをきかない、ガンバレー・ガンバレーと心の中で叫ぶ。気はあせるばかりだ。ワンピッチごとに、有峰湖・お花畑が私達を歓迎してくれてでもいるかのように、美しい姿をみせてくれる。食料装備共にボートの積載量を考えて最小にしていたのだが、それでもやはり重い荷になってしまった。予定よりも早く薬師の出会いに着いた。それでまる1日の余裕が出来てきた。黒部川の水音を聞くと全員疲れていたが、その水音によって再び生きかえった気持がした。やっと黒部川についたのだ。緑の木々の間から谷間の水を見た感激はひとしおだ。あの透明な水の色、石の一つ一つが透って見える。しかし偵察の時よりも水量がだいぶ少なかった。皆んなは、これではとてもだめだ、岩また岩ではと思ったに違いない。どうにかいけるだろうか？心の底に不安が募る。しかしファイトだ。

6日赤木沢附近までボートを持って行ってトレーニングを行った。岩また岩で漕ぐというよりむしろ、ボートをかついで降るといった方がいい位だ。それでも薬師沢あたりに来ると水量もわずかにふえ快適なトレーニングをやった。今回の装備で特にウエットスーツは保温の為に絶対に必要であることをこの時痛感した。6日のトレーニングは心よい疲れと共に明日へのファイトを、心の隅に不安をいだき、黒部の水音を聞きながら目をとじた。しかし寒くて眠れない、明日の為に十分睡眠をとらねばならぬのに、シュラフなしでシュ

ラフカバーだけだ、積載量の制限からこれもやむをえなかった。朝寒さの為に眼がさめた。今朝の気温は7度、大阪ではムンムンしているのに、食事の減量によって朝はモチ2個、あと行動食を各サブザックにつめこんでボートにつむ。手もきれるばかりの冷水、皆んな寒さに震えながらもウエットスーツを身につける。「高天ガ原登り口」まで食料装備関係で担荷組・ボート組に別れた。私は担荷をやったが、登り口までに野いちご・さくらんぼ等実をつけていた。ボート組は我々よりも遅れていた。かなり難航が続いているのだなあと思っていると、ボートの先端の黄色い部分が岩の間からのぞく、ここにくるまでもうかなり精神的・肉体的な疲労は、皆の顔からうかがえる。

最初から我々を全然よせつけないのか？出発してすぐメートル程の滝が数個階々の様に続き、それはどうにかスムーズにきり抜けたとの事だった。実際この岩又岩ではどうなるのかと思った。これからいよいよ高天ガ原を返って立石に行く1年と、残りの者全員で立石までくだることになった。特に1年を食料の積載量の点から、1日担荷してもらうのは非常に残念でならなかった。さあウエットスーツをつけ、救命具そしてヘルメット・地下足袋と何かビリッと全身がひきしまるのをおぼえた。漕ぎだすとすぐ10メートルもある滝である。滝はゴゴと音をたてて我々をまちかまえている。これはだめだザイルでおろそう。ボートをザイルにくる。その間にも水は容赦なく侵入する。ザイルをひっぱる。ザイルはしぶきをあげてピーンとはる、ぐいぐい力まかせて引っばる。どうにかボートは傷つかずに降ろせた。しかし一息いれる暇もない、冷水が顔から全身にふりかかってくる。ボートに水が入る。足場が悪い、足を水にさらわれる。どうにかしてもちなおす。滝は次から次と続く、顔を見上げると廊下(廊下とは岩

盤がU字型にえぐられて両岸が垂直に切り開いた地形をいう。)である、百メートル程の絶壁が我が行動を見下ろしているのだ。次第に川は神秘さを増し、無気味な切り立った両岸の絶壁に驚嘆する。この川の特性を肌を感じつつ自然とオールにも力が加わり、次から次へと岩をつき右・左のコースを決めて進んでいく。「降りろ」の命令でいっせい飛び降りボートを安全に位置する。「さあ俺だ」、「トロだ」、「水をかいだせ」、ヘルメットで水をかい出す回数もふえるばかりだ。

しかし、この水と大自然との戦いのうちに無き人にも5本のオールが破損し、ついには一番大切なボートにも10センチもの穴をあけてしまった。それは赤牛沢の出合までしか進んでいない場所だった。10人用ボートは、幅1メートル程の川幅でしかも岩の鋭い歯をみせていたのだ。これからというのにこの2日の苦闘で精神的にもかなりまいていた。それで赤牛沢のキャンプでこれから

の川の状態(川幅・水量・落差)、積載量、食料、装備の諸点について模とらしてみ、どうしても全員で下ることは少々無理だとの事になった。そこでリーダーの土井氏、OBの小野氏と4回生渡辺氏が最後まで下りとうすことになった。この黒部川という大自然の中で我々全員が全力を尽して闘ったのである。自然の人間に対するきびしさを学び、一滴の水がこれほどまで集まるその力を十分思い知らされた。いざ真の危機に面した場合の判断力を、やしなういい機会というものが与えられたように思う。その際、ほんのささいな困難ですぐなげ捨ててしまった自分を悲しまずにはおれなかった。

我々は心残りだったけれども、哀銀コース・水晶・野口五郎・鳥帽子・濁・七倉とあとの3名は、まだきびしい自然と戦っているのだ、きっと成功してくれ、頼むぞと祈りながら山を下っていった。

みのしま・ゆうじ(経済学部学生)

